

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2013.12) 平成24年度:123～126.

先天性疾患で医療処置を受けながら成長した女性が語る体験
～成人期への移行における体験を明らかにする～

日野岡蘭子

先天性疾患で医療処置を受けながら成長した女性が語る体験 ～成人期への移行における体験を明らかにする～

旭川医科大学病院看護部 日野岡蘭子

＜目的＞本研究の目的は、先天性疾患で医療処置を毎日必要としてきた女性の語りを通して、それまでの体験を明らかにすることである。具体的な視点は、入退院にかかわらず、幼児期から医療処置を毎日行う生活の中で、どのように周囲と自分との違いを認識し、何を考え、どのような体験をしてきたのかを自由に語ってもらい明らかにすることである。

＜倫理的配慮＞旭川医科大学倫理委員会の承認を受けた。対象者に文書及び口頭で研究協力を得、研究目的、方法、協力への自由性、学会発表への承諾、同意撤回の自由性、インタビュー内容の秘匿性と管理責任、匿名の厳守について文書と口頭で説明し署名を得た。

＜方法＞対象者は、研究協力の得られた施設に通院する、先天性疾患で生後間もなく経静脈栄養管理となった20代前半の成人女性1名。研究は半構造化面接による質的記述的研究とした。面接時間は2回計2時間55分、内容は同意を得て録音した。分析は逐語録を作成し単文化しコード化した。比較検討を行い共通する内容からサブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。信頼性は質的研究を行っている教員にスーパーバイズを受けた。

＜結果＞分析の結果331コード、37サブカテゴリー、11カテゴリーが抽出された。カテゴリーは、「疾患や治療を周囲に隠したかった子供時代」「隠すだけでは友人との関係維持ができなくなった中学時代」「配慮が欲しかった周囲の大人の対応」「罪悪感が生じた初めての感染の経験」「成長にしたがって変化した医師への思い」「自分と向き合う機会ととらえた20歳前の入院」「入院を経て成長し明確になった自分の内面」「当たり前だった点滴のある生活への複雑な思い」「同病者が期待する一体感への抵抗」「頼れる存在になりきれない看護師」「病院で働く人達に足りないと思う患者への配慮」であった。

＜考察＞抽出されたカテゴリーを検討すると、対象者は小児期から周囲から興味をもたれることに苦痛を感じ、中学生では周囲の理解を得られず不登校になる体験をし、つらかったこの時期に医療者への助けを求めている。幼いころから命と医療と真剣に向き合ってきた実感の中で成長し、20歳前の入院が転機となり自身の成長を自覚していた。

自分の気持ちを書くという行為によって自身を肯定し他人との関係を構築していた一方で、同年代が幼く見える感覚を自覚していた。生後間もなくから現在まで途切れることなく医療者と接し、看護師にはプロとしての自覚と真剣さを強く求めており、それまで身近でありながら頼れる大きな存在と捉えていた看護師の年齢が自分と近づいたことでの戸惑いを感じていた。

先天性疾患で医療処置を受けながら
成長した女性が語る体験
～成人期への移行における体験を
明らかにする～

旭川医科大学病院看護部

日野岡蘭子

目的

先天性疾患で在宅で医療処置を毎日必要とした女性が、生活の中で、どのように周囲と自分との違いを認識し、何を考え、どのような体験をしてきたのかを語りを通して明らかにすることである。

倫理的配慮

旭川医科大学倫理委員会の承認を得て行った。
面接を行う対象者には、文書および口頭で以下のことを説明する。

- ①研究目的・研究方法の説明
- ②調査協力への自由性
- ③同意撤回の自由性
- ④今後の医療・ケアを受けることの保障
- ⑤データ管理の徹底、匿名を厳守した上での関連学会での発表

研究方法

1. 対象：研究協力の得られた施設に通院する、先天性疾患で生後間もなく経静脈栄養管理となった20代前半の成人女性1名。
2. 面接時期：平成24年3月～5月
3. 面接場所：外来の一室、プライバシーを守れる個室で実施
4. データ収集の方法：
半構造化面接による質的・記述的方法
5. 分析：逐語録を作成し、意味内容を損なわないよう単文化しコード化する。相違点に着目し統合、比較検討を繰り返し検討結果からカテゴリー、サブカテゴリーを抽出する。
6. 信頼性：小児看護学の質的研究を行っている教員のスーパーバイズを受け信頼性を高めた

結果

対象 : 1名

面接時間 : 2回にわたり実施

95分、70分 計165分

カテゴリー : 9

サブカテゴリー : 35

コード : 331

時期	カテゴリー	サブカテゴリー
幼児期～ 低学年	1. 疾患や治療を周囲に隠したかった子供時代	<ul style="list-style-type: none"> ・周囲と異なる自分を始めて意識した幼稚園時代 ・周囲から興味を持たれることが苦痛と感じていた小学校時代
幼児期～ 低学年	2. 集団の中での検診等配慮が欲しかったと思う周囲の大人の対応	<ul style="list-style-type: none"> ・無神経と思えた周囲の大人たちの反応 ・幼少時は理解できなかった特別扱いをしないという方針
思春期～ 中学	3. 必死に隠そうとした一方で関係維持が難しくなっていた友人達	<ul style="list-style-type: none"> ・周囲と違って当たり前という考えで大きくなってきた自分 ・周囲の理解を得られないことで苦慮した中学生生活 ・必死で隠そうとしていたことを冷静に振り返る現在の自分 ・周囲との関係が変化する時期に大きかった家族の存在と影響 ・周囲との比較は必要ないことに気がついて楽になった気持ち
中学～ 高校	4. 感染によって湧き上がった主治医に対する謝罪の念	<ul style="list-style-type: none"> ・初めて感染を起こしてしまったことで感じた大きなショック ・感染を起こしたことで主治医に対して湧き上がった謝罪の念 ・改めて考えた生涯にわたり点滴をするという事実

<p>思春期 ～青年 期</p>	<p>5・成長に伴って変 化した医師への思 い (安心から反抗を 経て信頼へ)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分を守る絶対的な存在として医師を捉えていた 子供時代 ・思ったことが言いにくくなる長期の関係と狎れあい ・成長による変化があっても揺るがない医師との信 頼関係
<p>思春期 ～青年 期</p>	<p>6. 小児病棟と決別 し、書くことによっ て見えてきた自己 の内面・成長</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・周囲との良好な関係維持を難しいと感じていた入 院前までの自分 ・自分を見つめる機会となった小児病棟との決別 ・自分の変革を実感した20歳前の入院 ・書くことによって見えてきた自分の内面と他人との 関係性 ・自分に比べ幼く見える周囲の同年代 ・自己の変革によって見え、変化した点滴への思い
<p>思春期 ～青年 期</p>	<p>7・同病者が期待す る一体感への抵 抗</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自立していないと思う同病者 ・同病者の自立を阻んでいる過保護な母親 ・困惑の多いインターネットやブログの情報 ・安寧にならない同病者とのつながり ・自分には必要がない同病者との集まりや患者会

思春期 ～現在	8・頼れる存在になりきれないと思う看護師	<ul style="list-style-type: none">・期待する看護師像と現実との相違・頼りたい気持ちがあるが頼れる存在と思えない若い看護師・大人になって困惑が大きかった小児科看護師の対応・プロとしての自覚が不足していると思う看護師・真剣に向き合って欲しいと望む看護師
思春期 ～現在	9・患者への配慮が不足していると思う病院で働く人々	<ul style="list-style-type: none">・理解できなかった医学生の言動・病院で働く医療者以外の人に感じる個人情報に対する意識の低さ・役割を自覚してほしいと思うボランティアの人たち

考察

1・周囲に知られたくない気持ちと、検診時に配慮が欲しかった大人への思い

- ・対象者は幼稚園時代に初めて自分を自覚し、検診時等、周囲の大人の配慮のない対応に傷ついた。仲間意識を強く持つ思春期では、周囲と異なる自分を隠し通せないことに苦痛を感じていた

2・感染によって湧き上がった医師への謝罪の念と医師との関係性

- ・感染を起こした際は、ショックとともに主治医への謝罪の念が湧きあがった。主治医は守ってくれる特別な存在であり、成長によって対象者が変革しても関係性は揺るがないことを自覚していた

3. 成人病棟への入院で見つめた自分の内面・成長

- ・大人として扱われる成人の病棟では、小児病棟に入院していたそれまでと異なる大人との関係構築が求められ、成人の病棟での自分の存在を考え、気持ちをすべて書く行為によって、自分とは何かを考えるきっかけとなったことが明らかとなった。面倒と思っていた点滴も、気持のありようによって必要不可欠なものであるとの認識に変わった。
- ・自分が小さい頃から命と直結する経験をし、大人と接する機会が圧倒的に多かった中で成長してきている事から、他人との距離感の取り方を繊細に考えており、同病者が期待する一体感への抵抗は、自立と深い関連があると認識していることが伺えた

4. 看護師をはじめとする医療者に感じるプロとしての自覚の不足

- ・小さい頃は大人の人と捉えていた看護師が、自分と年齢が近くなり、さらに自分より年下の看護師が入るようになったことでの困惑が伺えた。
- ・命に対して真剣に向き合い自己管理の徹底を継続してきた自分が、幼少時から医師とともに自分を支えてくれた看護師の存在に対し、意識が緩いという言葉で語ったように、プロフェッショナルとしての自覚を強く求めていることが示唆された。

結論

1. 先天性疾患で医療処置を受けながら成長した女性の成人期への移行における体験では、幼稚園時代に周囲と異なる自分を自覚し、検診時の周囲の大人の配慮のなさに傷つき、成長とともに周囲と異なる自分を隠し通せないことに苦痛を感じていた
2. 主治医は何があっても守ってくれる特別な存在であり、思春期を経て自分が変革しても信頼は揺るがないことを再認識していたことが明らかとなった
3. 成人病棟への入院と自分の気持ちをすべて書くことによって、自分の内面をみつめるきっかけとなったことが明らかとなった
4. 現在は頼れる存在に成りえない看護師にプロとしての自覚を強く求めていた

看護への適用

- ライフステージに沿った集団生活を送る中では、
周囲との関係構築について、外来受診時に感情
表出しやすい環境の整備
- 感染を予防するための知識の提供
- 思春期を経て大人へと変革する自我に寄り添う
養育者としての視点
- プロフェッショナルとして患者に対応する看護師
の教育